

表現の思いを広げ、つくり出す喜びを味わう図画工作科学習指導

～折る・切る・貼る技能を十分に働かせる学習材の設定と支援の工夫の試み～

飯塚市教育研究所

飯塚市立蓮台寺小学校

教諭 嶋田 千鶴

1. 研究主題について

(1) 主題の意味

ア 主題について

表現の思いとは、「こんなのをつくりたい」「これをつくってこうしたい」という子どもの表現の夢や願いである。

図画工作科の学習の中で、子どもたちは、楽しい題材の提案や、新しい材料、表現方法に出会い、「きれいな色をつけて飾りたい」「強そうな形にしたい」というような表現の思いを広げ始める。そのような自分の主題や意図にふさわしい表現方法や材料を探したり試みたりする過程で、それらの思いが実現したとき、子どもたちはつくる喜びを味わい、また次の表現活動へ思いを広げていくのである。

この繰り返しの中で、子どもたちは自分のよさや有用感を認識する。そのことが獲得した技能を他の場面でも生かす力となるものと考えられる。

イ 副主題について

折る・切る・貼る技能とは、低学年の基本的な材料・用具の扱いであり、最も身近な創造的スキルである。また同時に、これらの技能は、自分の思いを思いのままに表現していくことに必要不可欠である。

創造的な造形活動において、思いの実現と技能の獲得は表裏一体のものである。その技能を楽しむとともに自分の思いに従って繰り返し試み、十分に働かせることができる学習材の設定と、支援の在り方を工夫することにより、子ども一人一人が表現の思いを広げ、つくる喜びを味わう姿を実現させることをねらいとしている。

(2) 主題設定の理由

ア 授業の反省から

前述の通り、図画工作科学習において、折る・切る・貼るなどの基本的な技能は、表現

の思いを実現するために必要不可欠なものであるが、技術指導を中心とした学習は、練習させられたり、その都度教師からの指示や指導がなされたりすることで、全員に同じ表現を求める教師主導の学習になりがちである。それでは、子どもは受身になって、技術そのものへの関心も薄く、結果的に自分の思いを十分に表現できないことが多いと考えられ、平成元年の学習指導要領の改定以来、イメージ重視の指導が中心になってきた。しかし、これまでの授業を振り返ると、そのような教師主導の学習に陥ることを恐れ、子どもの思いを壊さないようにするあまり、技術の指導に関して、ともしれば消極的になりすぎた傾向にあったことを反省する。

そこで、子ども一人一人が、折る・切る・貼るなどの基本的な技能を「もっと切りたいな」「こんなふうには貼ってみたいな」と自己目的的に楽しむとともに、十分な試行を繰り返すことができる創造的な造形活動を工夫し、充実させなければならないと考える。

イ 子どもの実態から

本研究に取り組む前の子どもたちは以下のような姿をもっていた。

いろいろな材料を使ってつくるのが好きであるが、早々に「できた」「これでいい」と言うような、心を込めてつくる、納得するまでつくるなどのこだわりをもてない姿が見られる。

つくりたい思いはあるが、できたものの完成度に満足できず、作品に愛着をもてないでいる姿が見られる。

「まっすぐに折れない」「付けたのに、とれてしまった」といった、折る・切る・貼るなどの創造的な技能を十分に働かせてつくることのできない子どもが多い。

つくったものを通して人と交流したり、

喜びを味わったりした経験が豊かであるとは言えない。

子どもたちは、テレビゲームやコンピュータの普及や、便利さや手軽さを最優先とする現代社会の様相に大きく影響されて生活している。

しかし、前述した子どもの姿は、そのような手を使ったものづくりの経験が著しく減ってきた生活の変化だけに起因するものではない。子どもの主体性におもねって、指導すべき内容である技術までも曖昧にしてきた図画工作科の授業が、子どもの手などを十分に働かせた造形活動を停滞させ、結果的に表現の思いや願いを実現させていないのだと考え、「折る・切る・貼る技能を十分に働かせる学習材と支援の工夫の試み」を副主題に設定した。

ウ 図画工作科がねらうもの

今年度実施された学習指導要領には、図画工作科の内容の改善の要点として「手などを十分に働かせる工作などの創造的な技能を高めるため、絵や立体に表す内容に充てる授業時数と、つくりたいものをつくることや工作に充てる授業数をおよそ等しくなるようにする」とあげられている。手でつくる、道具を使うなどの経験が著しく減少し、いわゆる「不器用」な子どもが増えている中、創造的な技能を十分に働かせる造形活動を意図的に充実させていくことを重要な教育課題として捉えていると考えられる。

したがって、子どもの「こんなをつくりたい」という主体的な表現の思いと「この材料を使ってつくりたい」この方法でつくれる」という創造的な技能を両面から高める指導の工夫が求められていると考える。

2. 研究の目標

子ども一人一人が表現の思いを広げ、つくり出す喜びを味わう姿を実現するために、折る・切る・貼る技能を十分に働かせることができる学習材の工夫と支援の在り方を明らかにする。

3. 研究の仮説

工作の学習において、学習過程を「である」「つくる」「あじわう」で構成し、以下のような手立てをとれば、子どもたちは、自分の思いをもとに折る・切る・貼るなどの技能を十分働かせて、表現の思いを広げ、つくる喜びを味わうことができるであろう。

折る・切る・貼る技能を十分に働かせることができる学習材の選定・開発

子ども一人一人の思いが連続発展し、表現活動にこだわりをもたせることができる支援

4. 仮説実証のための具体的構想

(1) 折る・切る・貼る技能を十分に働かせることができる学習材の選定、開発

折る・切る・貼る技能を十分に働かせる活動を展開させるために、以下のような視点から学習材を選定、開発する。

ア 材料と用具の精選、加工

子どもが繰り返し技法を操作し、精確な仕事をするためには、子どもの手の大きさや、巧緻性に合う材料を吟味することが大切である。紙の大きさ、厚みなどの違いで、子どもの表現も大きく変化する。与える材料・用具の素材や大きさを工夫し、子どもの発達と学習のねらいに合わせたものへ加工することで、子どもたちの創造的スキルへの追究に程よい抵抗感を持たせることができると考える。

イ 素材や用具、技法の新奇性

創造的スキルは繰り返し操作することで習得されるものであるが、単純な反復練習では子どもの関心・意欲が薄らいでいく。そこで、新しい素材や、用具、技法などに出会わせる活動を補助していくことで、新しい発見やめあてを持ち、手などを十分働かせて表現を追究する子どもの姿を導き出すことができると考える。

ウ 明快な目的意識や相手意識

「教室を飾るために」「プレゼントするために」など、子どもの生活の脈絡に沿って興味・関心を沸き立たせ、自分の思いや願いを追究し続けることができるような明快な目的意識や相手意識をもつことができるものとする。

(2) 子ども一人一人の思いが連続発展し、表現活動にこだわりをもたせることができる支援の工夫

子ども一人一人の思いが連続発展し、表現活動にこだわりをもたせることができるようにするために以下の支援を工夫し、行う。

ア 表現活動を誘い出す提案の工夫

「であう」段階では、以下の2点の支援を行うようにする。

子どもが思いを広げ、活動への期待をふくらませることができる題材の提案

表現の目的や、相手を意識させる提案の仕方を工夫する。子どもの期待感を高め、「よし、わかった」と表現活動を始動することができるような提案として、手紙や、演示、参考作品などと共に明確な言葉かけを計画する。

材料・用具の見通しをもつことができる参考作品の提示

主体的な表現活動を引き出すために、技法や材料の扱いや作り方を視覚的に捉え、予測できるような参考作品や図を提示する。

イ 表現活動にこだわらせる支援の工夫

「つくる」段階では、以下の3点の支援を行うようにする。

材料・用具の扱いを、楽しみながら繰り返し試すことができる状況・場の工夫

訓練や練習として同じ技法を単純に繰り返させるのではなく、子どもたちは自己目的的に技法を繰り返し操作し、結果的にその技能を高めることができるような状況・場を工夫する。具体的には、「たくさんつくる」「競争してつくる」などの活動を促す場面を設定することが考えられる。

操作イメージを鮮明にさせる言葉かけの工夫

折る・切る・貼る操作を行うための用具を選んだり、材料を探したりなどの思考・判断を繰り返させる言葉かけによって、子どもの操作に対するイメージ(操作イメージ)を鮮明にすることができる。操作イメージと巧緻性は転移するものであり、手先の技巧に限定できない。したがって、操作イメージを鮮明にすることは、創造的な技能の習得につながるものであると考える。

表現の視点を変える材料・用具・活動の補助

教師が意図する表現活動を直接的に指示するのではなく、子ども一人一人の思いに合った表現方法や、用具、材料などを子ども自身に思考させ、判断させるような方向性をもたせる材料・用具・活動を補助する。

ウ お互いの表現活動を交流させる場面の工夫

「あじわう」段階では、お互いの学びを交流し共有できるような場面を工夫する。表現活動や作品を通して友だちとふれあったり、自らの表現を見直したりする場面を工夫することは、子ども一人一人がつくる喜びを味わうことにつながるものである。

(3) 創造的スキルに関する予備的考察

運動能力や訓練としての技能習得とは異なり、表現活動を通じた、折る・切る・貼るなどの創造的スキルの習得については、造形に対する精神運動構造に基づいて考察することが必要である。本研究では、学習過程に沿って、デイブ(R.H.Dave)の精神運動領域の教育目標の分類を参考に考察を行う。デイブが示した精神運動領域の教育目標とは、精神的、神経的、筋肉運動的な協調を必要としている実際的な技能や習慣に関する目標である。これは、創造的スキルの習得過程とそのまま置き換えることができると考える。造形活動に関わる技法を試みたり選択したりする活動を繰り返す中で、モデルを見ること無しにその操作をより精確に行うことができるようになる技法の習得過程そのものであると言えよう。本研究においては、これを参考に創造的スキルの習得過程を「1.模倣」「2.操作」「3.精確」「4.自然化」と捉える(表1参照)。

「であう」「つくる」「あじわう」で構成された学習過程に沿って、これらの習得過程の現れ方を「折る・切る・貼る技能を十分に働かせている姿」の検証の物差しとし、子どもたちの表現結果と照らし合わせながら表現活動の変容を評価、考察していく一助としたい(図1参照)。

表1 創造的技能の習得過程

習得過程	子どもの姿
1. 模倣	演示、参考作品などをモデルとし、技法経験を楽しむ。
2. 操作	たくさん作る、作り直す等して、技法を試行する。
3. 精確	仕上がりにこだわる。 手早くできる。
4. 自然化	基本となる技法を基に自分なりの方法を創り出す。 授業外や他の状況、場面において、習得した技法を活用する。

折る・切る・貼るなどの技能を十分に働かせて、表現の思いを広げ、つくる喜びを味わう

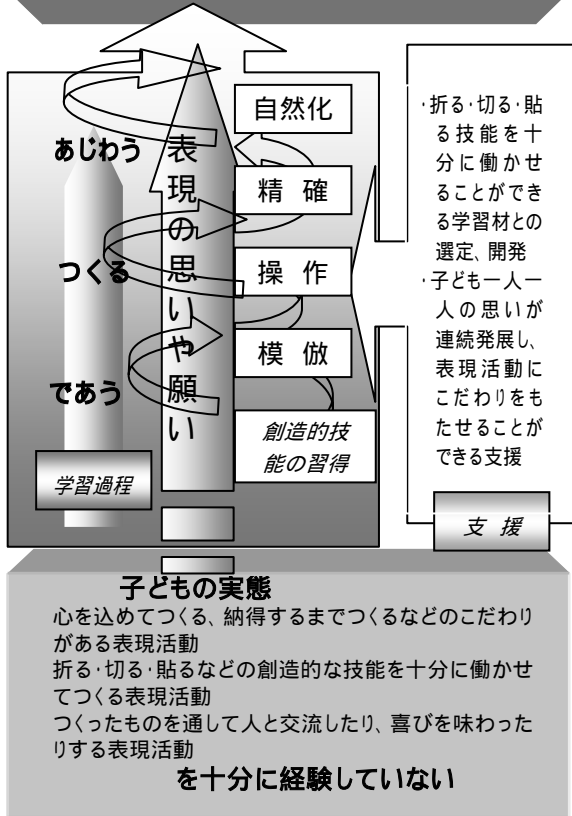


図1 研究の構想

(4) 授業設定

ア 実証授業の学年及び題材

第2学年「小さな生き物タウンをつくらう」

イ 目標の設定

紙で家をつくる活動に関心をもち進んで試したり工夫したりして表現しようとする。

筒をつくる技法をもとに糊代を工夫して美しく丈夫な接着を工夫することができる。

小さな生き物の家の形を、自由に想像してつくることができる。

自分や友だちのつくった家のよさやおもしろさに気づくことができる。

ウ 学習計画 (総時数8時間)

表2 学習計画

過程	学習活動
であう	1. 教師の演示を見て、1枚の紙から筒をつくる技法に興味をもつ。 2. 筒をつくる技法から、いろいろな筒の形ができることを知り、教師と一緒につくる。 3. 円筒以外の筒の形をたくさん考えてつくる競争をする。
つくる	4. 小さな生き物たちからの手紙を読み、いろいろな筒の形を使って、家をつくることを知る。 5. 色画用紙を選び、家の基本形をつくる。 (1) 色ケント紙を選び、筒の形をもとに家の基本形をつくる。 (2) 屋根をつけるための糊代をつける技法と出会い、美しく丈夫な接着を工夫する。 (3) 筒をつくる技法を使っているいろいろな筒の形から筒どうしを組み合わせたり、屋根をつけたりして家の形をつくる。 6. つくりたい家になるように、色ケント紙・色紙・のりを主材料にして細部を工夫してつくる。
あじわう	7. みんながつくった家をならべて、「小さな生き物タウン」をつくり、友だちの表現の工夫を見つけたり自分の表現を振り返ったりしてお互いの表現をあじわう。

5. 授業の実際と考察

(1) 折る・切る・貼る技能を十分に働かせる活動を引き出すことができたか

ア であう段階

材料・用具の見通しをもつことができる参考作品の提示

「であう」段階で、糊しろを作って一枚の紙を筒にする技法について、教師の演示を見ながら手順を追って模倣する活動を仕組んだ。一枚の紙が立体になる面白さと、自らの手で作くりながら手順を覚えていく具体性によって、どの子も技法を理解し、モデルなしでも筒をつくることのできるようになった。

子どもが思いを広げ、活動への期待をふくらませることができる題材の提案

子どもたちが生活科で関わってきた地域に住む小さな生き物の家づくりを題材として提案した。どの子ども自分の学習経験や生活経験を基にして容易に表現主題を決め、思いをふくらませることができた。

材料と用具の精選、加工した学習材の選定

子どもの創造的技能の習得状況を踏まえて、薄口の色ケント紙を材料として選定した。毛羽立ちにくい材料なので、糊付けに失敗してもやり直しが可能だった。また、大きなケント紙をはさみで正確に裁断するのは、この時期の子どもの手には抵抗が大きい。B4大、B4を縦半分、横半分に切断したものの3種類を準備することで、いろいろな形の筒を作る活動に専念することができた。材料を子どもの手の発達に合わせて精選し、加工したことは、子どもの技能を十分に働かせる活動を引き出す上で有効だったと考える。

素材や用具、技法の新奇性がある学習材

一枚の紙に糊代をつかって、筒の形(立体)をつくることは、子どもたちにとって新しく出会う技法である。提案の後、子どもたちは「すぐにやりたい」と反応した。また、SD法の結果からもこの技法に関心をもち、意欲的に取り組んだことがわかる。折り方を変えるといろいろな筒の形ができることから、折る技法を楽しみながら試す活動ができたことも有効だったと考える。

筒と屋根を結合する技法としての糊代作りも、切り込み方の工夫や、外折り、内折りの選択、糊付けの確かさなどが求められ、興味・関心をもって技法に取り組むことができたと考えられる。

イ つくる段階

材料・用具の扱いを、楽しみながら繰り返し試すことができる状況・場

いろいろな形の筒をつくる競争という技法あそびの学習活動を仕組んだ。子どもたちは、「数や種類をたくさんつくりたい」という思いでいくつも工夫しながら筒をつくった。競争を楽しみながら手を十分に働かせて技法を習得することができたと考えられる。短時間の活動ではあったが、創造的技能について上位の子

どもたちのつくった筒には十分な正確さが認められた。また、「限られた時間内でたくさんの種類をつくる」というめあては、子どもにとってははっきりと自己評価できる活動であったため、意欲的に学習を進めることができたと考えられる。

材料と用具の精選、加工した学習材の選定
糊しろのつけ方のモデルを最も複雑なもの(切妻型)と最も単純なもの(四角柱の辺に切り込みを入れ、四つの糊代を作り、四角形の紙を平らに付ける方法)の2種類提示した。その2種類の方法をモデルに、さらに単純な糊しろから、モデルの提示を模倣した切妻型の屋根を取り付ける糊しろ、そして、円錐型の屋根を円柱にとりつける糊代の工夫へと、模倣 操作 精確 自然化の4段階の習得過程がどの子どもの表現にも現れた。

表現の視点を変える材料・用具・活動の補助

説明とモデル提示だけでなく、実際に薄手の紙を使って試す活動(資料1)を紹介したことで、子どもの技法の工夫がより深まり正確さを増したことは特に有効だったと考える。

操作イメージを鮮明にさせる言葉かけ

「風が吹いたり、敵がやってきたりしても隠れていられるおうちになっているかな」という投げかけをした。



資料1 試作しながら思いを巡らす

すると、強度を確かめる活動から、糊代を外向きにつけるか内向きにつけるかななどのこだわりや工夫が生まれた。また、色画用紙をテープ状にして糊付けした装飾と接着をかねる技法や、穴をあけて紙を通す連結の仕方など、自分なりの技法を考え出した子どもの姿も見られた。

ウ あじわう段階

お互いの表現活動を交流させる場面

「あじわう」段階では、一人一人がつくった家を持ち寄って街づくりをした。子どもた

ちは話し合っ、いろいろな生きものの家を道でつないで、マジックで街にあるいろいろなものを描きこんでいった。次第にそれは立体的なものをつくる活動へと展開していった。木、ポスト、信号機などを、糊代を作って地面に建てていった。ここでは、獲得した技能を使って楽しく活動できたと考える。子ども同士の作品を通した対話も活発に交わされていた。できあがった街を一望し、「やったー」「すごいね」と歓声をあげる姿が見られた。

このような子どもたちの創造的な技能の習得過程の現われや、技法に関する工夫やこだわりのある姿から、折る・切る・貼る技能を十分に働かせる活動を引き出すことができたと考える。

検証児の各学習過程における折る・切る・貼る技能についての習得過程の現われは、表3の通りである。

表3 検証児の各学習過程における創造的技能的習得過程の現われ

習得過程	であう段階				つくる段階				あじわう段階			
	1 模倣	2 操作	3 精確	4 自然化	1 模倣	2 操作	3 精確	4 自然化	1 模倣	2 操作	3 精確	4 自然化
A児												
B児												
C児												

(2) 一人一人が表現の思いを広げ、つくり出す喜びを味わうことができたか

本学習活動において、子どもたちの作品をもとに表現の広がりを以下のように類型した。

表4 表現の広がり

四角柱を基本とした切妻型屋根の家	31%
円柱を基本とした平らな屋根の家	20%
円柱を基本とした円錐型の屋根の家	17%
多角柱を基本にした家	3%
円柱を横に寝かせた形の家	3%
いろいろな筒の形の家を横に繋いだ家	11%
いろいろな角柱や筒を組み合わせた家	17%

表4のような表現結果の広がりから、子どもたちの表現の思いは広がっていったものと考

えられる。また、SD法の結果、学習が進むにつれて、参加度、理解度、意欲、興味・関心の数値が高くなっている。このことから、作品の完成に向かって子どもたちの表現への思いが高まっていると考えられる。作品に添えた虫さんへの手紙の中の「いい家だからつかってね」中や外もぜったい気に入ってくれると思います」などの言葉から自分の表現に満足し、つくり出す喜びを感じていると考えることができる。

6. 研究の成果と課題

(1) 成果

学習材を工夫したことで、子どもたちの表現活動の中に試行錯誤が生まれ、折る・切る・貼る技能を十分に働かせ、納得するまでつくる活動にすることができた。

「であう」段階での材料・用具の扱いを、楽しみながら繰り返し試すことができる状況・場の工夫、「つくる」段階での題材の提案、試しの活動の補助、「あじわう」段階での表現を交流させる街づくりの活動などの各段階における支援を計画的に行うことによって、子どもの思いを連続発展させ、表現活動にこだわりをもたせることができた。

(2) 課題

創造的な技能の定着は、一つの題材だけでは難しい。題材の選定、開発に創造的な技能の視点を位置づけ、子どもたちが出会った技法を繰り返し経験できるように配列したカリキュラムと、各学年の発達段階を考慮した創造的な技能に関する評価規準を作成し、さらなる授業改善を行うことが求められる。

主な参考文献

教師のための図画工作 (1998年) 西光寺 亨
新・教育評価法総説 (1976年) 橋本 重治



資料2 いろいろな角柱を組み合わせてつくれた作品